ワークライフバランスの今

長高新聞は１９４８年に創刊された長野高校の誇る歴史ある学校新聞です。発刊号数は長い間日本一であり続けました。現在は年に６〜７号の頻度でタブロイド判の本紙を、行事ごとにＡ４判の速報紙を発行しています。
今回は長高新聞705号で企画された特集「ワークライフバランスの今」に掲載された記事の中から２つを厳選し、要旨を掲載します。全ての記事ををお読みになりたい方は、６月に開催される本校の文化祭でお買い求めください。

長高新聞
第705号
デジタル
ダイジェスト版
発行元
長野県
長野高校
新聞部

日本における労働の在り方は、近代化の進展とともに大きく変化してきた。明治期の工業化を契機に、それまでの農業中心の社会から、賃労働を基盤とする社会へと移行し、多くの人々が都市部に集まり工場労働に従事するようになった。当初の労働環境は長時間労働や低賃金が一般的であり、決して良好とは言えなかったが、労働運動の展開や法制度の整備によって、徐々に改善が進められていった。

戦後しばらくして訪れた高度経済成長期には、日本独自の雇用慣行である終身雇用や年功序列が広まり、企業は単なる雇用主にとどまらず、労働者の生活を長期的に支える存在となった。

この時期、企業への忠誠心や長時間労働は、会社への貢献であると同時に個人の生活安定にもつながるものと考えられていた。その結果、社会全体に安定をもたらす一方で、長時間労働を前提とする働き方が常態化していった。

しかし、バブル経済の崩壊以降、こうした雇用の安定性は揺らぎ始める。企業はコスト削減のために非正規雇用を拡大し、働き方の多様化が進む一方で、低賃金や不安定な雇用に直面する労働者が増加した。その中で、長時間労働やサービス残業、過剰なノルマを強いる、いわゆるブラック労働の問題が顕在化し、社会的な関心を集めるようになった。現代においても、こうした過酷な労働環境は完全には解消されていない。

このブラック労働の背景には、「生きるために働かざるを得ない」という構造的な問題がある。多くの人にとって労働は生活費を得るための手段であり、仕事を失えば生活そのものが成り立たなくなる。そのため、たとえ過酷な環境であっても離職が難しく、結果として企業側に過度な労働を強いる余地を与えてしまう。このように、生活維持のために労働を選ばざるを得ない状況自体が、ブラック労働を温存する要因となっている。

こうした状況を改善するためには、いくつかの取り組みが必要である。まず、労働者が最低限の生活を安定して維持できる社会保障や賃金制度の整備が不可欠である。次に、労働時間の上限規制や労働環境の監督体制を強化し、違法・不当な働き方を是正することが求められる。さらに、長時間労働を美徳とする従来の価値観を見直し、仕事と生活の調和、いわゆるワークライフバランスを重視する意識への転換も重要である。

本来、労働は人間の尊厳や自己実現を支える活動であるはずだが、現実には多くの人が「生活のため」という理由で過酷な状況を受け入れている。この状況を変えるためには、これから社会に出ていく世代が主体的に行動し、不合理な働き方に対して疑問を持ち、声を上げていくことが必要である。「働くために生きる」のではなく、「よりよく生きるために働く」という価値観を選び取ることこそが、日本の労働の在り方を根本から変えていく鍵となるだろう。

オランダの多様な働き方

日本のワークライフバランスは国際的に見て低水準であり、ＯＥＣＤの調査では38カ国中33位と評価されている。特に週50時間以上働く労働者の割合が高く、長時間労働が大きな課題となっている。

一方、オランダは世界幸福度ランキングで常に上位に位置し、欧州でも最も幸福度の高い国の一つとされる。２０２３年のデータでは、オランダの一人当たりＧＤＰは日本の約２倍であるにもかかわらず、週平均労働時間は日本より短い。この背景には、結婚や出産期にあたる30代女性の就業率が高いことがある。

さらに、オランダの大きな特徴はパートタイム労働の普及であり、パートタイム就業率は45％以上と世界最高水準である。「パートタイム経済」とも呼ばれるほどで、日本の約20％と比べても大きな差がある。オランダではパートタイムでもフルタイムと同等の権利が保障され、時間外手当やボーナス、年金などの待遇に差がない。また多くが無期契約であり、雇用の安定性も高い。このような制度により、キャリアを維持しながら私生活も重視できる環境が整っている。

加えて、オランダでは不本意にパートタイムを選ぶ人が少なく、ほとんどが自ら望んで選択している点も特徴的である。さらに、４日勤務制など柔軟な働き方も広がり、家庭や個人の時間を確保しやすい社会となっている。

以上より、オランダでは制度と意識の両面からワークライフバランスが実現されているのに対し、日本では長時間労働や雇用形態の違いが課題である。ワークライフバランスの向上は単なる時間調整だけでなく、人生の質を高める重要な要素であることが示されている。

クラブにかける 2026

クラブ自主運営の光と影

今号から始まる新コーナー「クラブにかける２０２６」。本コーナーは、１９８６年に本紙で連載されていた「クラブにかける’86」の現代版である。本コーナーでは、本校におけるクラブ活動の課題や、この40年間でのクラブ活動の変遷について取り上げる。

本校のクラブ活動は「自主運営」を重んじ、生徒自身が方針や活動内容を主体的に決定する点に大きな特色がある。顧問に依存せず自ら考えて行動するこの仕組みは、責任感や判断力を育てるうえで意義が大きい。実際、運動系クラブでは練習メニューを話し合いで決める中で意見が対立することもあるが、その過程を通じて相互理解が深まり、結束力の強化や活動への納得感の向上につながっている。自分たちで決めた内容だからこそ、主体的に取り組む姿勢が生まれる点も大きな利点である。

しかしその一方で、自主運営の名の下に問題が生じているケースも存在する。例えば運動系クラブでは、本来活動が制限されるべき定期考査期間中にも「自主練習」として活動が継続され、実質的に参加が求められる状況が見られる。これは競技力維持という面では一定の効果があるものの、学業との両立を困難にし、精神的・時間的負担を増大させる要因となっている。

同様の課題は文化系クラブにも見られる。休日確保が求められているにもかかわらず、週7日の活動が常態化している例では、心身への負担に加え、私生活や学習への影響も無視できない。一方で、活動頻度を必要最低限に抑え、限られた時間で効率的に取り組むことで学業との両立を実現しているクラブもあり、これは自主運営の望ましい在り方の一例といえる。

このように、自主運営は大きな可能性を持つ一方で、その質が各クラブの判断に委ねられるため差が生じやすい。重要なのは、「自主」を単なる放任と捉えるのではなく、責任ある選択と規律ある運用を伴うものとして理解することである。特に上級生が中心となってその意識を共有し、活動と学業のバランスを考えながらより良い形を模索していくことが求められる。それによって、クラブ活動全体の質と魅力を高めることができるだろう。

令和8年度入学式

ゆたけき心ぞ我らが頼み

令和8年度入学式が今月4日に行われた。全日制281人、定時制10人の合計291人が本校での新しい生活をスタートした。新入生は吹奏楽班、管弦楽班が合同で演奏するホルストの「惑星」より「木星」をバックに入場した。齋藤俊樹教頭によって開式を宣言され、国歌を斉唱した。その後、新入生一人一人の名前が呼ばれ、入学許可が正式に下された。

学校長式辞で佐野浩一郎学校長は「リーダーとは、個人が自主性と責任感をもつ一人一人であることを前提に、集団をまとめることができる人物だ。本校での学びを通して未来を力強く切り開く人材になってほしい」と述べた。

新入生代表宣誓を行った1組の小穴耕平さんは、現代社会でアイデンティティの確立が重要視されていることに触れ、「様々な考え方に触れながら自分の信念を確立し、いかなる場面でも誠実な努力を続けたい」と決意を語った。

入学する生徒は「不安もあるけど3年楽しんで過ごしたい」「勉強を頑張りたい。特に化学の授業が楽しみ」「勉強もがんばりつつ、充実した高校生活を送りたい」「弓道班か管弦楽班に入り班活動を頑張りたい」「学業とアルバイトを両立し、楽しみたい」などとそれぞれ意気込んだ。

新入生の保護者からは「楽しく部活も勉強も両方楽しんでほしい」「自分のペースでいいので高校生活に慣れて、楽しんで欲しい」「勉強や班活はもちろん、自分のやりたいことをがんばってほしい」「長野高校に無事入学することができてうれしい。友達をたくさん作り楽しい高校生活を送ってほしい」「一度しかない高校生活を満喫してほしい」「入学するまで頑張ってきたので悔いのないように過ごしてほしい」といった、本校での新しい生活に期待を膨らませる声が数多く聞かれた。

1年米国リーダーズ研修

1年生を対象とした米国研修が、先月15日から21日にかけて実施され、生徒たちはボストンとニューヨークを訪れた。初日は成田空港からボストンへ移動し、到着後はホテルで休息を取った。2日目にはハーバード大学を訪問し、現役学生との交流やキャンパスツアーに参加したほか、AIや沈黙をテーマとした議論、がん研究に関する模擬講義を受講し、知的刺激を受けた。

3日目は班別自主研修としてボストン市内を巡り、その後マサチューセッツ工科大学（MIT）を見学し、先進的な研究や学生の学びに触れた。夕方にはニューヨークへ移動した。4日目は現地高校を訪問し、授業体験や日本文化の紹介を通して交流を深めたほか、国連本部の見学で国際社会の仕組みを学び、9・11ミュージアムでは歴史の重みと平和の大切さを実感した。

最終日はタイムズスクエアやニューヨーク証券取引所などを訪れ、フェリーから自由の女神を望んだほか、海外で活躍するOB・OGとの交流も行われた。

今回の研修は異文化理解を深め、生徒たちにとって大きな成長と自信につながる貴重な経験となった。